

台湾における図工（美術）教育事情

— 現地校と日本人学校との交流授業で見えてきたもの —

前高雄日本人学校 教諭

滋賀県栗東市立栗東中学校 教諭 安 土 憲 彦

キーワード：合同授業，図工教育

1. 現地校七賢國小学校学生作品展から

台湾の小学校には、特色のあるカリキュラムを編成しているところが多く、専門的な教科を重点的に指導するクラスを設置している。概ね小学校3年生時から導入されており、学校によって体育班、音楽班、美術班、理数班などがある。そのクラスに入るには、選抜試験が実施され、当然そのクラスにふさわしい適性を持っているか試される。台湾は、日本と同じ小学校6年間、中学校3年間の義務教育があり、その義務教育期間の中でこのような選抜クラスを実施している学校が多い。日本でこのような専門的な学科を設けているのは、せいぜい高校ぐらいからであり、小学校それも3年生からこのような特異なカリキュラムを組むことは日本では考えられない。

高雄市には2つの学校に美術班が設置されており、七賢國小学校には美術班がある。各学年1クラス30名が在籍しており、このクラスには遠方からも通学してくると聞いている。この学校もそうだが、台湾の児童たちの描く絵は楽しくユーモラスなものが多い。題材も日本より多岐にわたっており、学ぶ点がかなり多い。専門的な指導を受けていることもあり、技術的にもしっかりとしたものを持っているが、決してその技術に走ることはなく、子どもらしい自由な発想でのびのびと描いている。

下の作品は、母親節（母の日）に描いた自分の母親の姿である。朝早くから夜遅くまで仕事や家事に奔走している姿がユニークに描かれている。日本だったら母親の愛や優しさなどが前面に出てくるところだが、ここは台湾、日本以上にあわただしく生活している姿が、千手観音のような母親の姿から読みとれる。型にはめず、自由に子ども発想を伸ばす指導が、ここでも垣間見てとれる。



風景を描いた作品も多くあったが、どの作品も人物が画面の中に多く描かれている。その為、画面から楽しい雰囲気が良く伝わる。水彩画と言うよりイラストレーションのような作品がこの展覧会では多く出品されていた。子どもたちの描く絵には、その歴史的風土が顕著に表れる。どの絵を見ても感じるのだが、原色のような明るい色彩や楽しんでいる人物の表情などは、絵画表現の技術だけでなく、この台湾高雄の風土とも関係しているのではないだろうか。それなら、日本人学校の生徒は同じ国で生活しながら、偏見のある見方だが、「日本人らしい」絵しか描けないのはなぜか。子どもたちの感性を伸ばさず、指導者自身の価値観を押しつけているのではないかと反省した。

他方、立体の作品はもっとユニークである。材料の使い方が豊富で細かな技術もしっかりとしているので、小学生が作ったと思えないぐらい洗練されている作品が多い。

2. 七賢國小美術班との合同授業

本校の小学部3、4年生と七賢國小学校美術班3、4年生は、2008年11月28日に七賢國小学校で合同授業を行った。作品展で見た作品がどのような授業の中で生まれたのかを見る絶好のチャンスである。また、本校の児童たちが立派な施設で専門的な指導を受けられる最高の機会でもある。

合同授業は4つ題材を設定していただき、3、4年生は4つのグループに分かれてそれぞれの教室に入った。4つの題材は水墨画「瞑想の世界」、陶芸「仕事をしている人」、彫刻「いただきます」、紙版画「夜景」である。日本の分類で言うと、「絵画」「彫刻」「工芸」「版画」の分野になるが、七賢國小学校からもらった指導案を見ると全て「芸術と人文」の領域になっている。小学校において日本の図工に当たる教科は、全て「芸術と人文」に当たるようだ。音楽の教科も同様で、一般に表現分野教科とでも言い換えられるのではないだろうか。

全ての授業は、プロジェクターを使って子どもたちに詳しく説明するところから始まっている。映像資料などはほとんど自作であり、子どもたちに分かりやすい資料を時間をかけて開発していることがわかった。

(1) 水墨画「瞑想の世界」

ゴッホのお話を子どもたちに聞かせるところから始まった。資料映像は専門的なもので、小学生には少し難しい内容ではないかと思うが、中学校で扱う鑑賞でも十分使えるものであった。

子どもたちに説明する手段として、映像以外に劇教育（ドラマエディケーション）という手法を取られていた。先生自らが画家ゴッホになりすまし、感情豊にセリフを言っていく。そして、子どもたちはゴッホの友だちとして、どのような接したらよいか考えていく。先生が子どもたちに感情から揺さぶりをかけ、主題へと導いていく方法は見事であり、授業の展開全てが本当にドラマチックであった。

七賢國小学校の子どもたちは、先生の劇に引き込まれ素直にその世界に導かれていくが、日本人学校の子どもには抵抗があるようだ。それは、こういった導入の仕方が初めての経験であり、面食らっている感じがする。しかし、



この年代は素直に感情の起伏を表現できる年齢ではないだろうか。子どもは小さな大人ではなく、非常にデリケートであり、脳の可塑性がとても豊かである。そういったことをこの授業で再発見することができた。

作品をつくる時間より、導入に多くの時間と労力をつぎ込む。もちろん題材によって違うとは思いますが、この授業に関しては、大半が先生と子どもたちとのやりとりで進んでいく。最後に水墨画をかくのだが、導入と直接関わってはいない。しかしながら心をほぐした段階で作品をつくらせたことで、一皮むけたような表現が見られたような気がする。

初めは慣れない授業形態にとまどいを持っていた日本人学校の子どもたちだが、後半は先生の手法にうまく乗せられ、普段見せないような顔つきに変化していった。教える側の自信を持った指導理念を感じさせられる授業であった。

(2) 陶芸「仕事をしている人」

この授業もプロジェクターを使いながら、働いている人たちの映像を見せるところから始まった。ただ一方的に見せるだけでなく、「これは何をしているところ？」など子どもたちに質問しながら進行していく。その後、この仕事にはどんな道具が必要だろうか、実際、どのような動きをしながら働いているのか、その仕草を真似させる。

そのなかで仕事の大変さを実感させたり、多様な仕事が生の中を支えていることを知るのである。この場面だけ見れば立派なキャリア教育である。

一通り仕事について話し合った後、体の作り方や細かな技術など、具体的なねんどの使い方について説明していく。技術的な指導は半分以下で、心情面や作品を作る心構えなどをいかに重要視しているかがわかる。

(3) 彫刻「いただきます」

授業はゲームを通して自己紹介から始まった。その後いろんな料理の映像をプロジェクターで見せ、食材の特長や盛りつけ方法などを知る。その中で子どもたちは、今日の授業に対してのモチベーションを上げていき、具体的に何を作ろうか創造力を高めていく。

使われていた粘土はカラー粘土で、非常に高価なものである。それを惜しげもなく子どもたちに提供し、子どもたちも意欲的にきれいな粘土を使っていく。カラー粘土は発色も良く、違う色を混ぜたり、組み合わせたりしながら無数の表現が可能となる。こういった粘土を使うだけでも、自然と創作意欲が沸くものである。

出来上がりの作品は、七賢國小学校と日本人学校に大きな違いが見られた。七賢國小学校はカラフルで多彩な表現が多かったが、日本人学校の子どもたちはどこかこぢんまりとしていて大胆な作品が少なかった。食べ物に対しての感性の違いや、今まで培ってきた表現力の違いが出ているのだろう。絵を見ても感じるのだが、台湾の子どもたちの作品は明るくのびのびとした作品が多い。そういったところは見習うべきであり、これからの授業にも生かしていきたい。

(4) 紙版画「夜景」

七賢國小学校の版画教室には美術系の大学に置いてあるような大きなプレス機がある。今回はこのプレス機を使って紙版画の授業を見せてもらった。

まず、この授業もプロジェクターを使っていろんな夜景の映像を見せる。実際見た映像から空の色はどのような感じだったか、街や森の雰囲気はどのような感じだったかみんなで話し合う。その後、各自が感じた夜の景色を思い思いに画用紙に描く。細かな表現ではなく、雰囲気を大切にしながら水彩絵の具で表現し、一旦乾燥させておく。

その次に厚紙を使って製版していくのだが、七賢國小学校の子どもたちは手際の良さが本校の生徒とは違う。厚紙に鉛筆で線を描き、黒くしたいところはマジックインキで塗り、インキの塗っていないところをカッターナイフで切っていく。本校の生徒たちもカッターナイフを使うことは慣れているのだが、作業の速さが違う。七賢國小学校の子どもは集中力が違う。先生の声と同時に作業に取りかかり黙々と進んでいくのだが、日本人学校の子どもたちは何をすればよいのかわかっていても、まわりの様子を見てからでないと作業にかかれぬ。この差が最後まで響き、七賢國小学校の子どもたちの作品は版画を刷るところまで時間内にできたが、日本人学校の子どもたちの大半は間に合うことができなかった。できあがった作品は水彩絵の具で描いた紙の上にシルエットで版画がのり、幻想的な作品に仕上がった。題材の魅力が十分に伝わる素晴らしい教材であるといえる。

3. 合同授業を終えて

七賢國小学校で行った合同授業は、大変実りのある体験だったと思う。まず、日本人学校だけでなく日本国内でも受けられない専門的な内容であったこと。授業の進め方や授業形態が全く違ったこと。何よりも素晴らしい指導者と充実した環境（設備）の中で授業が体験できたことが一番であった。最初はとまどいのあった本校の子どもたちであったが、指導者の適切なアプローチと休み時間もいっしょに過ごした七賢國小学校の子どもたちとの親密度によってその変容も見られた。